

令和元年度「土砂災害防止に関する絵画・作文」作文小学生の部
鹿児島県知事表彰 最優秀賞

「あの雨さえ・・・」

鹿屋市立輝北小学校 5年 森^{もり} 義仁^{よしひと}

「社長、だめですよ。あぶないですよ。」

7月2日。ふだんとはちがう、ものすごい雨だった。風の音も強くて、まったく外のじょうきょうが分からなかった。テレビをつけると、川がはんらんしているところや土しゃくずれがおきて、家がつぶされているところなどが、ニュースでながれていた。ここもけっこう雨がふっているけど、大じょうぶかな。

父は外の様子を見て、

「牛が心配だから、今から牛しゃに行ってくる。」

じゅう業員さんたちの言葉も聞き入れず、父は大あわてで、牛しゃへ向かった。

ぼくの家は、肉牛と美しいすがたを競う牛を育てている。どちらの牛も大切な牛だ。休みの日には、えさをあげたり散歩に連れて行ったりしてお世話をしている。ぼくが行くと

「モォー。」

と鳴いて頭をすりよせてくるかわいい牛たちだ。ぼくは、帰りのおそい父を待ちながら、「どうか牛たちが無事でありますように。」と願った。ずぶぬれでどろまみれのすがたで、父は夜おそく帰ってきた。牛たちは、大じょうぶだったのだろうか、と気になったが、

「あれだけ対さくもしていたのに。無力だ。」

と父は、ぼそつと言った。その言葉を聞いて、牛たちがだめだったのだろうと感じた。そして、何も話しかけることができなかった。

後から聞いた話だが、牛しゃへ着いたときみた光景はすさまじかったそうだ。雨がふり続き、川もぞう水している様子を見て、父は事前に、土しゃがくずれてきたら広い方へにげられるように、牛しゃのしきりを外しておいた。しかし、何頭かの牛はにげおくれ、土しゃで体半分以上うまっている牛や足だけしか見えていない牛もいた。必死に生きようとしている牛たちを何とかして助けようと父たちは、ロープで牛を力いっぱいひきあげた。ひきあげられた牛は、体中きずだらけ。

「このまま放っていても、牛たちが苦しむだけだ。命は、むだにはできない。」

父はなくなるとその牛を出荷することにした。

「あの雨さえふらなければ・・・。」手塩にかけて育ててきた牛たちをやむなく出荷すると決めた父は、助けられずくやしい思いでいっぱいだっただろうな。また、生きたいと必死にもがいていた牛たちのことも思うと、まぶたがあつくなかった。ただ雨が長くふり続いただけ。それだけなのに。

このさい害で、自然のこわさと人間の力ではどうすることもできないということを思い知らされた。雨がふり続くと、あのさい害を思い出してしまう。今回みたいな大雨によるさい害が二度と起こってほしくない。しかし、さい害は、いつ起きるかわからない。だからこそ、無力だとわかっていても、事前の対さくは必要だ。

「大切なものを失わないために。」